

Weland—Velent—Völundr

Zur Entstehung und Entwicklung der Wielandsage (I)

Mitsunobu Ishikawa

In diesem hier gedruckten ersten Teil der Wielandsage-Forschung, deren Endziel es ist, den Ursprung und die Entwicklung der Sage klar zu machen, hat der Verfasser versucht, zuerst zwei von den drei existierenden bildlichen Darstellungen aus der Sage, dann alle uns in der altenglischen Sprache überlieferten Literaturwerke, die die Wielandsage erwähnen, durchzuprüfen. (Eine dritte bildliche Darstellung konnte wegen Abbildungsmangel diesmal nicht geprüft werden.) Im Zusammenhang mit dem altenglischen „Waldere“ ist dabei auch der in St. Gallen entstandene lateinische „Waltharius“ mit untersucht worden.

Im Vergleich mit den größeren altnordischen Quellen hat man bis jetzt diesen obengenannten kleineren Quellen nicht genug Aufmerksamkeit erwiesen. Diese erwähnen zwar meistens nur zufällig Wieland, aber gerade deshalb können sie eben auch bedeutend sein, da man vielleicht dort dem echten Bild vom Schmied, das sich das damalige Volk machte, näher kommen kann, als in den Werken, in denen Wieland Hauptgestalt ist. In den letzteren kann doch viel Neues und Individuell-Literarisches noch zugefügt worden sein.

Die Eigenschaften der einzelnen Quellen lassen sich etwa so zusammenfassen:

Das sogenannte Franks'sche Runenkästchen(7./8.Jh.) zeigt als Erstes den Meisterschützen Egill im—oder wenigstens in der Nähe vom—Wielandsagenkreis. Daß Wieland hinkt, scheint hier an seiner Körperhaltung ablesbar zu sein. Man findet nur eine kopflose Leiche neben dem Amboß im Gegensatz zu den altnordischen Hauptquellen.

Der Bildstein aus Gotland (9./10.Jh.) stellt den fliegenden Wieland merkwürdigerweise als einen großen Vogel, nicht als einen Menschen mit einem Fluggewand wie in den übrigen Überlieferungen, dar.

Trotz zwei Strophen über Wieland und Beadhild teilt uns der altenglische „Deor“ (8. Jh.) nicht mehr mit als wir von den altnordischen Quellen wissen. Nur daß der Deor-Dichter schon das Happy-end der Wielandsage mit der Heirat vom Schmied und der Königstochter—wie man erst in der viel

späteren „*Þiðrekssaga*“ erfährt—gewußt haben muß, ist bemerkenswert.

Der „*Waldere*“ (8. Jh.) läßt uns als Erster über Wielands hervorragendes Schwert *Miming* und seine Beziehung zu *Nidhad* und *Witge* hören, über die man sonst nur in der „*Þiðrekssaga*“ erfährt.

Im lateinischen „*Waltharius*“ (10. Jh.) hat *Wieland* nicht—wie im „*Waldere*“—das Schwert, sondern die harte Brünne von *Waltharius* geschmiedet.

Wieder als Meisterschmied für die Brünne, die der Held des schon stark christlichen Buchepos „*Beowulf*“ (8. Jh.) von seinem Großvater geerbt hat, wird *Wieland* im Epos erwähnt.

In den drei zuletzt genannten Quellen ist der stabreimende Ausdruck im Sinne von „*Wielands Werk*“ gemeinsam, was die Berühmtheit von *Wieland* damals als Meisterhandwerker vermuten läßt. Nicht nur als Meisterschmied, sondern auch als Meisterhandwerker überhaupt muß sein Name nämlich gegolten haben: in einem Eddalied webt er sogar.

König *Alfreds* „*Boethius*“ enthält eine berühmte Stelle, wo *Alfred* den namhaften Römer *Fabircius* mit dem „berühmten und klugen Goldschmied *Wieland*“ umschrieben hat, sicherlich aus etymologischer Assoziation. *Wieland* wird hier zum erstenmal „Goldschmied“ genannt. Noch wichtiger ist der hier 5-Mal wiederholte, wieder stabreimende feste Ausdruck „kluger *Wieland*“ (*þæs wisan Welandes ban*). „*wis*“ kann man als festes, individualisierendes Epitheton für *Wieland* auffassen. Dieses Epitheton kann, so glaubt der Verfasser, zum Verständnis der *Wieland*-gestalt unter den damaligen Angelsachsen beitragen.

Im vorgesehenen zweiten Teil werden altnordische Überlieferungen untersucht.

Weland—Velent—Völundr

名工ヴィーラント伝承の系譜 (I)

石 川 光 庸

敵王に捕われ、足の腱を切られて強制労働をさせられていた名人鍛冶が、策略によって王子の首をはねて殺し、王女を犯し、人工の翼をつけて逃亡に成功する——これを基本的な骨組みとするいわゆる「名工ヴィーラント⁽¹⁾伝承」は中世初期のゲルマン諸国において、「ジークフリート・ニーベルンゲン伝承」と同様によく知られた共通財産であったらしい。異教時代のゲルマン人に共通の、ほとんど本能的ともよびうるような復讐意欲を核として成立している物語であるが、時とともにさまざまな要素——中世盛期の宮廷叙事詩やメールヒェンなどの——が付着し、イギリス、北ドイツ、スカンディナヴィアでは近年にいたるまで妖精の鍛冶ヴィーラントとして民話の世界にその姿をとどめていた。⁽²⁾

ヴィーラント伝承の起源については、ギリシャ神話中のヘファイストス

- (1) ヴィーラント Wieland はこの名人鍛冶の高地ドイツ語の名称であり、古代英語では Weland, 古代北欧語では Völundr (Edda), または Velent (Piðrekssaga) であるが、本稿では便宜上個々の資料を越えた共通呼称としては高地ドイツ語形を使用することにする。
- (2) ヴィーラントを代表とする妖精鍛冶から鍛冶製品を受けとり、代金は特定の場所に置いておくといういわゆる「沈黙交易」(Stummer Handel) の伝説は北ヨーロッパ各地に普及している。Gordon 編訳: Anglo-Saxon Poetry (Everyman's Library, No 794) 13頁脚注; Veerkamp: Stummer Handel in Schmiedesagen Europas und Südasasiens, in: Zeitschrift für Ethnologie, 53, 参照。

やダイダロス伝説との類似点や、東ゲルマンのルギ族 (Rugier) におこったと伝えられる類似事件との関係などがこれまでさまざまに論じられてきたが (詳細は後述)、すべて推測の域を出ていない。本論文の最終目的もヴィーラント伝承の源泉を探求することにあるが、さしあたっては直接なんらかの形でヴィーラントに言及している各資料に対象を限定し、その異同を比較・検討することによってヴィーラント伝承の発生、発展を考察してみたい。

なお、伝承という言葉は、特定個人の創意によってではなく、集団の中で自然に発生して口から耳へ伝えられる口頭伝承、口承文芸の意味に用いられることが多いが、私はここでは文献、美術品、出土品などにも定着した伝承という広い意味に用いている。どの民族もそうであったように、古代ゲルマンの文芸はすべて口承文芸であり、そのごくわずかの部分のみが文筆文芸として羊皮紙に定着した。残りの大部分は、美術品のモチーフとして使用された幸運な例をのぞいて、キリスト教への改宗という大きな文化的・社会的変動の波の中に消失するか、あるいはきわめて断片的に、祖型をとどめぬほど変形して (たとえば注1で触れた沈黙交易のように) 民間のことわざ、慣用句、民話などの口碑として伝わるのみである。したがって、主にヴィーラント伝承の起源を追求しようとするこの論文では、祖型に近いことが期待できる、できるだけ古い時期の文献・美術資料に研究対象を限定せざるをえない。この点で、現在も生命を保っている民間伝承・口承文芸を中心に研究する民俗学とは出発点も対象も異なっていることをおことわりしておきたい。

このように対象を時間的に限定しても、ヴィーラントに関する資料はイギリス、北欧、ドイツになお相当数存在する。ただし文献資料に関しては、それらのうちヴィーラント伝承そのものが主題となっているのは古

代北欧語の Edda (“Völundarqviða”) と Þidrekssaga (84章～136章) のみであり、古代英語の悲歌 Deor 以下になるとヴィーラント伝承の部分的引用か、あるいは鎧や刀剣が名工 ヴィーラントの手になることに言及している程度に過ぎない。現在知られている ヴィーラント 伝承の大部分は Edda と Þidrekssaga によるが、これを裏づけ、補足する資料として三点の美術資料があり、ある意味では Deor 以下の文献資料よりはるかに重要度が高い。⁽³⁾

そもそも中世初期においてゲルマン諸国の工芸品や石碑に描かれた豊富なテーマは、非常にしばしば、キリスト教的文化が浸透する以前のゲルマン社会を活写する有力な手がかりとなることがある。というのは、改宗以前のゲルマン社会に言及した文献資料は多くの場合 12/13 世紀にならないと出現せず、その場合も中世盛期風の宮廷文化の色合いを帯びてしまっているのが普通だからである。ヴィーラント伝承に関しては、図 1、図 2 にあげたいいわゆる「フランクスの小箱」⁽⁴⁾ に刻まれた図柄がこの意味で第一

- (3) 「ある意味で」という限定を付したのは、たとえ断片的言及を含むに過ぎない小資料であっても、伝承の祖型解明に必ず役に立つからである。むしろ、もともと口承の文芸であったものの研究には、かえって偶然的な、「落ちこぼれ」的な資料の方が役立つことが多い。そこに、口承文芸の母胎となった一般民衆の常態そのものをかいま見ることができるからである。
- (4) 「フランクスの小箱」(Franks' または Franks Casket) という名は、この鯨骨製小箱が 1867 年に当時著名な学者兼収集家で後に大英博物館長の Sir Augustus Wollaston Franks によって大英博物館に寄贈されたことにちなむ。したがってこれを Frank's Casket と表記したり (H. Uecker: Germanische Heldensage, Stuttgart 1972, 84 頁), あるいは「フランク人の箱」と称する (吉村貞司: 『ゲルマン神話』, 読売新聞社, 昭和 47 年, 37 頁) のはおかしい。この他に以前の所有者の居所 (フランス中部) にちなんで Casket of Auzon, Clermont Casket, Runenkästchen aus Auzon bei Clermont-Ferrand などとも呼ばれる。なお, Sir Wollaston Franks が英国滞在中の若き南方熊楠をおおいに支援し, 南方をしてフランクスのおかげで「今日始めて学問の尊ときを知ると小生思い申し候」とまで書かせた事情は彼の「履歴書」に詳しい (『南方熊楠随筆集』, 筑摩書房, 1968 年, 10 頁以下)。



図1

級資料とすることができる。

ゲルマン諸国の中でいちはやく独自の美術を発展させた英国 Northumbria で作られ、現在大英博物館所蔵のこの鯨骨製⁽⁵⁾小箱は、そこに刻まれているルーン文字の語形や工芸史上の見地から遅くとも8世紀前半以前に作られたことが確実視されている。⁽⁶⁾ この箱のふたと4側面を飾っている彫刻のうち、ヴィーラントに関連するものはまず正面の左半分で(図1),⁽⁷⁾ 鍛冶道具を左手に持った男が右手に何かを受け取り、又は差し出している。2人の女のひとは鍛冶屋に手を差しのぼし、もうひとは壺状のものを手にさげている。鍛冶屋の足もとには死体がひとつ転がっている。右端には白鳥かなにかの鳥を捕えている男がいる。(右半分は $\text{MFXI} = \text{Mægi}$ というルーン文字からもすぐわかるように東方の三博士の図で、左半分とは無関係と言ってよい。) 鍛冶屋の情景だけでは Siegfried-Sigurðr 伝説の一部と考えられないこともないが、(Edda や Völsungasaga によ

(5) Krause (Runen, Berlin 1970, S. 92) はセイウチの骨 (Walroßbein) としているが、後述のルーン詩(注9)からも鯨骨が妥当であろう。

(6) E. Dobbie: The Anglo-Saxon Minor Poems, The Anglo-Saxon Poetic Records VI, New York/London 1942 cxxiv.

(7) Dobbie: 上掲書による。

れば Sigurðr は妖精鍛冶 Reginn の許で修業した), 女性が登場していること, 首なし死体があること, 鳥の羽根を集めているシーンがあることによってこれがヴィーラント伝承を扱っていることは明白である。後世の Deor や Völundarqviða や Þiðrekssaga によって詳細に知られるヴィーラントの復讐物語の諸要素——捕われの身の名工ヴィーラントが敵王の無邪気な王子をひそかに殺してその頭骨で作った酒杯を献上し, 細工物を頼みに来た王女を酔わせて犯し, 鳥の羽根で作った飛行衣で脱出する——がここに描かれているのである。Edda や Saga によると王女が修繕を頼みにきた細工物は腕輪であるが, この鯨骨彫刻では彼女が手渡している(又は受け取っている)品物はあまり腕輪のようには見えない。むしろやや細長いカップのように見えるところから, これは彼女の殺された兄弟の頭骨を細工した酒杯であろうとの説もあるほどである。⁽⁸⁾ 王女の隣りにいるもう1人の女性は普通侍女とみなされているが, 上述の酒杯説に関連させて考えれば, 何も知らずに兄弟の頭骨細工を手持って喜こんでいるもうひとつの王女の姿とも解釈はできるようである。Edda や Saga の記述によるとヴィーラントは逃亡できぬよう足の腱を切られて足なえになっているのであるが, この彫刻でヴィーラントの右足にそれがはっきり表現されているかどうかは確定しがたい問題である。しかしふた(図2)や他の側面に描出されている人物と比較してみると, ことにふたの最も左側の兵士と比べた場合, 左右均衡のとれた感じがなく, なにか不自然な姿勢という印象を受けることはいなめないようである。Edda と Saga および後述の石碑彫刻では王子は2人になっているが, ここでは死体は一体しか見えない。これが伝承のちがいによるのか, あるいは単に狭い平面にたく

(8) Schück: Studier i nordisk litteratur- och religionshistoria I, 178, Dobbie: 上掲書による。

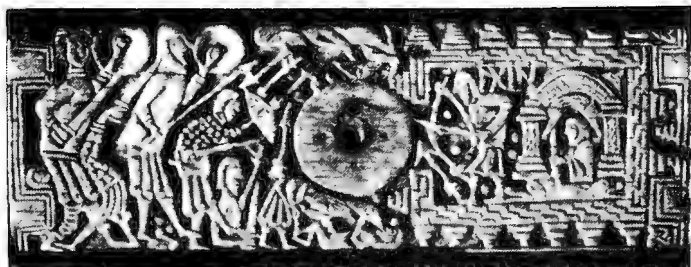


図2

さんの図柄をはめ込むためにこうなったのか（この小箱の寸法は約 23 cm × 19 cm × 13 cm）はわからない。鳥をつかまえている男は *Þiðrekssaga* の記述によればヴィーラントの兄弟で弓の名人エギル (Egill) のはずである。この面の上下左右に刻まれているルーン文字は頭韻を踏んだ二行の古代英語詩であるが、箱の材料となった鯨について唄っており、⁽⁹⁾ 図柄については何も教えてくれない。

図2⁽¹⁰⁾は箱のふたで、攻城風景であり、後世の文献——Edda と Saga の他に10世紀のスカルド詩人 Eyvinðr と Hallfredr——において弓の名人でヴィーラントの兄弟として登場する Egill⁽¹¹⁾ がさかんに矢を射て城を守っている。彼が Egill であることは、すぐ右上に彫られたルーン文字 *ÆGILI* (=Ægili) によってしかわからない。彼の後の窓には女性がひと

(9) Hronæs ban.

Fisk flodu ahof on fergenberig.

Warþ gastrik grorn, þær he on greut giswom.

<鯨の骨：大浪がこの魚を岩の岸に打ち上げた、獣は猛り狂った、砂の上をのたうちまわって> hronæs ban は標題の如きものと見なすべきであろう。

(Dobbie: 上掲書)

(10) A. Heusler: Die altgermanische Dichtung, Darmstadt 1967 による。

(11) *Völundarqviða* には Egill, *Þiðrekssaga* には Egill と Aegill, *Franks' Casket* には Ægili という表記で登場する。

り立っている。左方には楯をかざして攻め寄せる武士が描かれているが、すでに雨あられと降る矢に当たった者もある。画面中央上部に飛んでいるように見える男がおり、飛行衣をつけて脱出するヴィーラントとする解釈もあるが、左手に楯を持っているらしいところを見ると、中央下部に描かれた像と同じように Egill に射倒された武士と考えるほうが良いようだ。見る人の視点を一方向に固定したものとしなくて自由な角度からさまざまな形象を描くことは当時まったく普通であったし、ことにふたの中央に取手の円形土台が大きな場所を占めていることから、図案的意識が働いてその上下の空間を対称的図柄で埋めたものと考えerのほうが自然である。Piðrekssaga において Egill は、後に Wilhelm Tell と分かちがたく結びつくことになったいわゆる「我子の頭上のりんご射ち」を行っており、このためその何らかの表現をこの図柄に発見しようという努力もなされたが、これもないものねだりに類するようだ。Egill の後の女性を王女とし、飛ぶヴィーラントと「りんご射ち」の情景をもここに見出せるとすれば、Piðrekssaga の内容にぴったりするのではあるが。

箱の他の側面にはエルサレム落城図や（背面）、ローマを建国した Romulus と Remus の図（左側面）などの世界史にテーマをとったものと、おそらく Sigurðr-Siegfried の死を扱ったらしい図柄（右側面）とが彫刻されていて、ヴィーラント伝承を含む正面の右半分には聖母像と三博士が描かれていることと考えあわせると、当時のイギリスで異教ゲルマン的伝承がキリスト教とどのような関係にあったかを推測させるひとつの手がかりになるが、これについては稿を改めて論じたい。

第2の造形美術資料として、バルト海のほぼ中央に位置するスウェーデン領ゴートランド島 (Gotland) に多数見出される彫刻石碑のひとつがあ

げられる(図3)⁽¹²⁾。島ではあってもバルト海交易の要地であり、あの古代英語詩の英雄 ベーオウルフ(Beowulf) 自身がその一員であった民族ゲアタス(Geatas——Gotland とは「ゲアタスの住む土地」の意味にはかならない)の領土でもあったから、ゲルマン民族に共通のさまざまな口碑伝説の類が石碑の彫刻という形で今日にまで伝えられていることに不思議はない。とはいえ、キリスト教改宗以降に異教的・世俗的モチーフの芸術資料が多く为国でほとんど姿を消してしまったことを考えれば、ゴートランド(のみならず北欧各地)に石碑類が豊富に残されたことは、稀有な幸運と言うべきであろう。Hauckはこれら石碑類のゲルマン古代研究にとっての重要さを、アイスランドで文字に定着して残されたエッダ写本の重要さに劣らぬものとみなしている。⁽¹³⁾ これら彫刻石碑の最古層はほぼ600

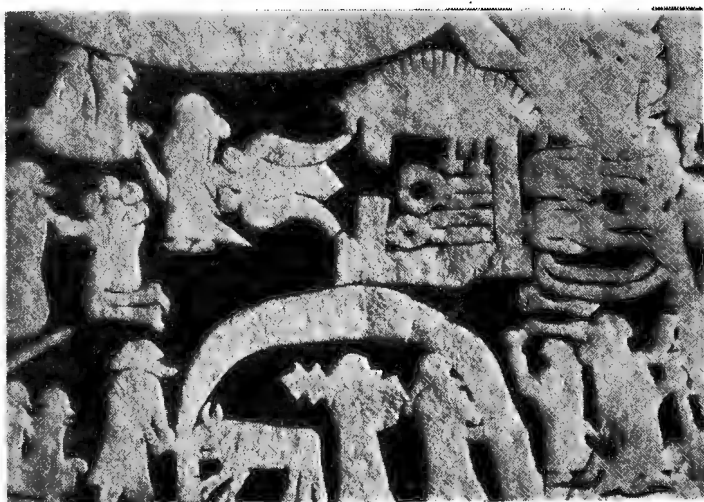


図3

- (12) Bildstein Ardre VIII の部分図。K. Hauck: Germanische Bildendenkmäler des frühen Mittelalters, in: Deutsche Vierteljahresschrift, Bd. 31, 1957, による。
(13) K. Hauck: 上掲書, 352頁。

年頃のものとして推定され、その用途は火葬された死者の記念碑としてであった。彫刻のモチーフは多くゲルマン神話、あるいはほとんど神話視された英雄伝承から取られた。死者の家系がこれらの神々や英雄に由来し、いまや彼がその祖先の世界に帰属することを示して、死者の鎮魂をはかったものなのであろう。

ヴィーラント伝承のモチーフを含む問題の石碑は9世紀ないし10世紀のものと推定されている。部分図であるために全体の構成を検討するのは不可能なのだが、上部中央のやや右寄りに芝土(?)の屋根をもった小屋があり、天井から2本のハンマーが下がり、またやっとも2本置いてあって、これが鍛冶小屋であることがわかる。小屋の右側には首のない男の子の死骸が二体ころがっていて、ヴィーラントの策略によって首を落とされた王子であることを示している。鍛冶小屋の左壁には窓が切ってあって、奇怪な形の大きな鳥がそこから飛び立っている。すなわちこれが、Egill に鳥の羽根を集めてもらって飛行衣で脱出する(Þiðrekssaga) ヴィーラントにちがいない。(Edda の Völundarqviða ではどんな方法で飛ぶのか具体的な記述はない。) しかしこの図ではヴィーラントは全く一羽の巨鳥に化しているとは思えない。K. Hauck はこの方が構造的により古いものと考えているが、⁽¹⁴⁾ この点については後述する。怪鳥のすぐ左に女が描かれていて、当然ヴィーラントに犯された王女であろうという見当はつくが、具体的な状況についてはそれ以上はわからない。ヴィーラントに関する形象はこれだけで、残りの大部分は本来ゲルマン神話で主神的位置を占め、雷神・武神・農耕神を兼ねる剛勇のトール(Thor-Þórr)の事蹟を示しているらしい。左上は巨人ヒュミル(Hymir)と釣りに行ってミズガルズ(Miðgarðr)の大毒蛇を釣り上げようとしているところ、その下は多頭の

(14) K. Hauck: 上掲書, 359頁.

巨人と戦っているところ、下部中央は彼が従者と彼の車を引く山羊を連れて旅に出ているところでもあろうか？⁽¹⁵⁾

死者儀礼に用いられた石碑に神話と英雄伝説が並んで描かれていることは、当時英雄伝説がどのように受容されていたかを知るための重要な手がかりになりうるが、これについても稿を改めて論ずるつもりである。

ヴィーラント伝承についての造形美術資料は上記2種の他にもイギリスの石造十字架破片があるのだが、まだその写真等を入手できないでいるので、⁽¹⁶⁾ それについては後に補足することとし、文献資料の検討にうつる。

<古代英語文献、附 Waltharius>

中世初期の大陸においては、ローマ文化と一体化したキリスト教の進出によって、ほとんどすべての文化現象はキリスト教一色におおわれ、異教的要素が文化の表面に姿をあらわすことは稀であり、この状態が中世盛期にいたるまで続いた。ローマ帝国を滅ぼした蛮族は、文化的には逆征服されたわけであるが、この点で、ブリタニアを侵攻したゲルマン族はやや異色であったとすることができる。もともとブリタニアのケルト人は侵略者に対する抵抗意欲が強く、ローマ人にもその後のゲルマン人にも決して融合しようとしなかったため、ローマ軍団が撤退した後に来たゲルマン人は異民族の文化と徹底的に対決することなく、自分たちに固有の伝統を比較的純粋に保存することになった。その反面、アイルランド修道僧の活発な布教活動と、グレゴリウス大教皇の意を受けたアウグスティヌス以下のローマ修道僧の忍耐強く巧みな——異教の風習を換骨奪胎してキリスト教に

(15) このようなトールの活躍ぶりについては Edda 中の Hymisqviða (邦訳：谷口幸男、『エッダ』、新潮社、1973年、中の「ヒュミルの歌」)、Snorra Edda 中の Gylfaginning (谷口訳『エッダ』中の「ギルヴィたぶらかし」) に詳しい。

(16) Hauck: 上掲書によれば、W. G. Collingwood: Northumbrian Crosses, London 1927, 161頁 以下がこの十字架破片を扱っている。

取り込むというような——伝道とによって、アングロ・サクソンの諸王国は比較的早い時期に改宗した。(大陸ゲルマン族の伝道はボニファキウス Bonifacius などのアングロ・サクソン人聖職者の力によるところが大きい。)そしてここにおいて異教的伝統とキリスト教との融合がおこなわれ、大陸ゲルマン族の間ではそもそも文字に定着することなく忘れ去られた、あるいはいったん記録されても——ルートヴィヒ敬虔王 (Ludwig der Fromme) に関して知られているように——宗教的情熱によって湮滅させられてしまったような異教的伝承がキリスト教的色彩を帯びた形で写本に記録されており、ゲルマン文化を知るための貴重な資料となっている。

ヴィーラント伝承についても、Edda と Saga で知られる内容を裏づける性質の短詩が2篇、名工ヴィーラントに言及しているものが2点存在している。

1) デオール (Deor)

他の宮廷詩人に地位を奪われた詩人デオールの嘆きをうたっているため『デオールの嘆き』(Deors Klage, Deor's Lament)とも称されている6節42行のこの頭韻詩は、各節末尾にリフレインがつく珍しい抒情的形式と、英雄時代の伝説をあつかった内容とで、古代英語文学中でも古層のもの(8世紀なかば頃?)と見なされている。各節においてゲルマン族(あるいは少くともアングロ・サクソン族)の間で有名な受難について語られ、「それにも終りはあったのだ、これも同じであってくれ!」(Pæs ofereode, pisses swa mæg!)というリフレインがつく。第1節が足の腱を切られたヴィーラントについて、第2節がヴィーラントにはらまされた王女ベアドヒルド(Beadohild)⁽¹⁷⁾の受難、第3節はこの詩以外に伝承のない Mæðhild

(17) Beadohild < beadu + hild. Edda では Böðvildr < böð + hildr. 古代英語、古代北欧語のどちらの要素も「闘争」をあらわす。Þiðrekssaga にはこの王女の名前は出てこない。

と Geat について、第 4 節は 30 年にわたる Peodric の放浪について、第 5 節は専横な Eormanric 王のもとでのゴート人の苦しみについて、第 6 節前半では諦念めいた神への帰依が述べられるが（この部分は後代の挿入という意見もある）、後半ではいよいよ詩人自身の苦悩が唄われている。つまりヴィーラントに関係するのは最初の 2 節のみである：⁽¹⁸⁾

Welund him be wurman⁽¹⁹⁾ wræces cunnade,
 anhydig eorl earfoþa dreag,
 hæfde him to gesiþþe sorge ond longað,
 wintercealde wræce; wean oft onfond
 siþþan hine Niðhad⁽²⁰⁾ on nede legde,
 swoncre seonobende on syllan monn;
 Ðæs ofereode, þisses swa mæg!

ウェールンドは剣のために⁽¹⁹⁾ 困苦を知った、
 毅然たる勇士が 艱難苦勞を味わった、
 お供をするのは 苦悩と不満と
 冬の冷たい困苦のみ。悲嘆にくれるのも再三再四、
 これもニーズハド⁽²⁰⁾ にはめられた足枷のため、
 しなやかな腱という足枷、人並み優れた勇士に対して。

——それにも終りはあったのだ、これも同じであってくれ！

Beadohilde ne wæs hyre broþra deap
 on sefan swa sar swa hyre sylfre þing,
 þæt heo gearolice ongieten hæfde,
 þæt heo eacen wæs; æfre ne meahte
 þriste geþencan, hu ymb þæt sceolde:

(18) ここに引用したテキストは R. Kaiser: *Medieval English, An Old English and Middle English Anthology*, Berlin 1961³, による。F. Klaeber: *Beowulf*, Boston 1968³ にもわずかに異なるテキストがのっている。

(19) be wurman の箇所はさまざまな Lesearten がある。

(20) 敵王の名。Edda では Niðuðr/Niðaðr, Saga では Niðungr. 原形は Nið-höðr 「侮辱一闘争」

Þæs ofereode, þisses swa mæg!

ベアドヒルドの心の悩みは わが兄弟の死にもまして
われとわが身のうえのこと。

はやくもすでに気づいていたのだ、
わが身の身重であることを。それから後というものは
考えるだにおそろしく、行く末案ずるたびごとに。

——それにも終りはあったのだ、これも同じであってくれ！

Völundarqviða や Þiðrekssaga に伝えられるヴィーラント 伝承の内容を補足するようなものは、ここには見出されない。むしろ、史実上の英雄 Theoderich や Ermanrich に関する事象以上にヴィーラント 伝説が当時著名であり、その主要な要素に関しては前者 2 人についてと同じくおそらくほとんど史実と見なされていたのであろうという副次的側面のほうが注目すべきことなのかもしれない。なお、妊娠した王女の苦悩にも Þæs ofereode——「終りはあった」ということは、『デオール』の作者がヴィーラント 伝説を、——後の Þiðrekssaga に明らかなように——2 人の結婚というハッピーエンドの物語として知っていたことを推測させる。

2) ワルデレ (Waldere)⁽²¹⁾

フン王アッティラのもとに人質となっていたアキタニアの西ゴート人ヴァルターが、フン族の財宝を盗み、恋人ヒルデグンデ (Hildegunde) とともに故郷めざして逃げるが、国境の峠でブルグンド王グンター (Gunther) の一行に襲われて孤軍奮闘する——これを主な内容とするいわゆる「アキタニアのヴァルター」伝説は、ゲルマン人の間に広く知られていたらしく、

(21) Waldere は(新高ドイツ語) Walther, Walter の古代英語形。同一人物を扱った 10 世紙のラテン語作品では Waltharius. 原義は古高ドイツ語 waltan + heri 「軍勢統率者」。

数種類の中世文献が残されているが、古代英語にも頭韻詩の2断片が残されている。おのおの30行強にすぎないが、その双方にヴィーラント伝承に関するかなり重要な言及が含まれている。第一断片では彼が鍛えたという名剣ミミング (Mimming; *Þiðrekssaga* では *Mimungr*) について語られ、第2断片ではヴィーラントと王女ベアドヒルドの間に生まれた勇士ウィディア (*Widia*; *Þiðrekssaga* では *Viðga*) が語られる。すなわちミミングとウィディアという固有名詞がヴィーラント伝承にあらわれるのは、おそらく8世紀に作られたと推定されるこの『ワルデレ』において初めてなのである。この名剣と人物についての詳細を知るためには、われわれは数百年をへだてた後に成立した *Þiðrekssaga* をまたなければならない。13世紀北欧の、中世盛期の宮廷叙事詩的・メーメルヒュンの色彩を濃厚に帯びた、*Saga* としても相当後期風の *Þiðrekssaga* にあらわれる一見付随的要素が、すでに8世紀の英国文献に言及されていることは、ヴィーラント伝承の系譜を知るための重要な手がかりとなるにちがいない。『ワルデレ』がなければ、われわれはヴィーラントの名剣も彼の息子も、中世盛期に至ってはじめてこの伝承に付随して成立した龐大な二次的伝承の一部とみなしてしまうであろうから。

(Hildegýð...)⁽²²⁾ hydre hyne georne:
 Huru Welande[s] worc ne geswiceð
 monna ænigum ðara ðe Mimming can
 heardne gehealdan. Oft æt hilde gedreas
 swatfag and sweordwund secg æfter oðrum.

(ヒルデギュドは……)⁽²²⁾ 熱をこめて彼を励ました：
 本当に、ウェーランドが鍛えたこの作は、そもそも

(22) 引用は Dobbie: 上掲書 (4~6頁) による。また (Hildegýð...) は筆者による補足。和訳には Gordon: *Anglo-Saxon Poetry*, Everyman's Library, No. 794 をも参照した。

この剛剣ミミングを手にする価値ある武士のだれにせよ、
裏切ることはありません。闘いの場でいくたびもつわものたちが
次々と、血まみれになり打ち倒れ、この刀のさびになったのです。

(第1断片1～5行)

...ce bæteran⁽²³⁾

buton ðam anum ðe ic eac hafa
on stanfate stille gehided.
Ic wat þæt hit ðohte Ðeodric Widian
selfum onsendon, and eac sinc micel
maðma mið ði mece, monig oðres mid him
golde gegirwan (iulean genam),⁽²⁴⁾
þæs ðe hine of nearwum Niðhades mæg,
Welandes bearn. Widia ut forlet;
ðurh fifela gewefl þld forð onette.

私もまた、宝石をちりはめた
鞘に静かにいこわせておく この一刀のそのほかに、
これに勝るような刀は……⁽²³⁾
私の知る限りでは、テオドリックもこれをウィディアそのひとに
進呈しようとしたのである。刀にそえて
財宝の多くをも、また刀にそえて他の品々をも、
黄金でかざってやろうとした。(ウィディアの行為は報われた)⁽²⁴⁾
ニズハド王の孫、ウェーランドの子であるウィディアが彼を
捕われの身から助け出してやったがために。
怪物の支配地を通して、彼は急いで進んでいった。

(第2断片1～10行)

- (23) 写本の ce bæteran の前の失なわれた部分についてさまざまな意見があるが、Klaeber の [ne geseah ic æfre swil]ce bæteran という補足が妥当であろう。すると「私もまた……これに勝るような刀は〔見たためしが無い〕」の意となる。Dobbie: 上掲書139頁。
- (24) iulean genam: この部分は解読が困難で多数の提案がなされているが、ここでは Dobbie の見解にしたがっておく。Dobbie: 上掲書140頁。

きわめて断片的な、保存状態も最善とはいいかねる写本のため、テキストの解読、解釈に関して校訂者によって大きな差異があるが、現在一般的な見解では第一断片はワルデレに対する恋人ヒルデギュドのはげましの言葉と考えられている。グンターの一味に襲われたワルデレはグンターとハーゲンを除いた全員を切り倒すが、最後にグンターという強敵をひかえ（ハーゲンはもとワルデレの親友であり、最初から彼との戦いを拒絶したか、あるいはしばらく戦ってから敵がワルデレであることに気づいて戦いを中止したか、のどちらかである）、一夜の休息をとる。その際ヒルデギュドがワルデレの所持する名刀ミミングに言及して彼をはげます言葉が第1断片の主要部分を構成していることには、異論はほとんどない。これに反しここに引用した第2断片の1～10行の語り手がだれであるかについては諸説あるが、現在最も広く通用している解釈によれば、ブルグンド武士たちを倒して疲労困憊したワルデレは一夜の休息をとり、翌朝最後の戦いが初まる前にそれぞれ言葉を交える。その際グンターは自分も、テオドリックからヴィーラントの息子ウィディアに与えられた名刀を所持することを誇るが、これが1～10行の内容であると考えられる。他説のうち説得力あるものは、ワルデレがグンターと和解すべく腕輪と名刀ミミングを彼に差し出すがグンターはこれを受けず、自らもヴィーラント作の名剣を帯びていることを誇る部分がこの一文であるという Brandl の見解であろう。⁽²⁵⁾ 一夜の休息とヒルデギュドのはげましとはこの後に来ることになるので、Brandl の説によれば第1断片と第2断片の順序も入れかわるわけである。

ここで『ワルデレ』と同一伝承をあつかった、10世紀のスイス東北部

(25) A. Brandl: *Geschichte der altenglischen Literatur*, in: *Pauls Grundriß der germanischen Philologie*, Straßburg 1908, S. 898 (48).

St. Gallen で書かれたと推定される有名なラテン語英雄詩『ワルターリウス』(Waltharius)⁽²⁶⁾ にふれておきたい。エッケハルト一世 (Ekkehard I; 973 年に死去) が 930 年頃にラテン語学習の一習作として書いたらしい 1456 行におよぶこの英雄叙事詩は、ドイツ語による同種のものがいくつかの断片をのぞいてほとんど存在していない状況において、単に「アキターアのヴァルター」伝説説明に重要であるだけでなく、古代ゲルマンの英雄詩一般を知るためにも貴重な文献であることは言うまでもない。しかし、ヴィーラント伝承については『ワルターリウス』はただ一箇所、ヴィーラントが鍛えたというワルターリウスの鎧にふれているにすぎない。

Ecce repentino Randolf athleta caballo
Praevertens reliquos hunc importunus adivit
Ac mox ferrato petiit sub pectore conto.
Et nisi duratis Wielandia fabrica giris
Obstaret, spisso penetraverit ilia ligno.
(962~966行)⁽²⁷⁾

見よ、思いもかけず勇士ランドルフが
他者に先んじ馬にて駆けつけ、猛然と打ちかかった。
胸の下をば鉄筋入りの槍の柄で突いたのだ。
ヴィーラントの堅く鍛えた鎖鎧がふさがなかったら、
堅木は彼を貫いてしまっただろう。

ブルグント勢はグンターとハーゲンを含めて13名であるが、1対1でしか勝負のできない狭い峠を利用して、ワルターリウスはつぎつぎと敵方の

- (26) この他に『ワルターリウスの歌』(Waltharii poesis), 『剛腕のワルターリウス』(Waltharius manu fortis) などともよばれる。
(27) 引用テキストは K. Langosch: Waltharius, Ruodlieb, Märchenepen, Lateinische Epik des Mittelalters, mit deutschen Versen, Darmstadt 1956, による。

武士を打ち倒してゆく。ランドルフはその9番手である。最後に、以前に結んだ義兄弟のよしみからワルターリウスとの斬り合いを避けていたハーゲンも、窮地に追いこまれた主君グンターを徒手傍観して見殺しにはできず、ここに三ツ巴の戦いが行なわれ、三者それぞれ負傷して和解することになる。

『ワルデレ』ではヴィーラントは刀鍛冶として言及されているのに対し、『ワルターリウス』では鎧を鍛えたことになっている点が異なっている。

3) ベーオウルフ (Beowulf)

ほぼ完全な形で伝えられているゲルマン英雄叙事詩としては最古のもの(8世紀前半の成立と推定)である古代英語の『ベーオウルフ』に関しては、今さら多言を要さない。この3182行から成る頭韻詩においても、ヴィーラントが鍛えた鎧が登場する：

Onsend Higelace, gif mec hild nime,
beaduscruda betst, þæt mine breost wereð,
hrægla selest; þæt is Hrædian laf,
Welandes geweorc. Gæð a wyrd swa hio scel!⁽²⁸⁾

(452~455行)

(ここでは筆者の拙い訳のかわりに厨川文夫：『ベーオウルフ』岩波文庫、昭和16年、の古雅な名訳をあげる)
若し戦我を奪はば、甲冑の中の最も優れたるもの、
我が胸を護る胸甲の最上なるものをヒュゲラークが
み許へ送り給へ。そはフレーゼルの遺産(かたみ)にして
ウェーランドの造りしものなり。運命は常に成りゆくべき
ままに成りゆくものなり。

(28) 引用テキストは F. Klaeber: Beowulf and The Fight at Finnsburg, Boston 1968³ による。

現在のスウェーデン南部に居住していたゲーアタス族 (Geatas—この部族については上記10頁を参照)の英雄ベオウルフが、デンマークの王フローズガール (Hroðger) の館に災危をもたらす怪物グレンデル (Grendel)⁽²⁹⁾を退治しに乗りこみ、フローズガールに面会してグレンデルと戦う決意をのべているところである。ヒュゲラーク (Hygelac) はゲーアタス族の王であり、ベオウルフにとっては叔父でもある。フレーゼル (Hreðel) もゲーアタスの先代の王でヒュゲラークの父、ベオウルフの母方の祖父である。

ここにおいてもヴィーラントは「最上の鍛冶」の製作者であって、特に刀鍛冶とはされていない点『ワルターリウス』と同様である。

しかしそれはいずれにせよ、『ワルデレ』『ベオウルフ』『ワルターリウス』の3資料において Welandes worc, Welandes geweorc, Wielandia fabrica というきわめて類似した表現が用いられていることは注目に値する。作品が刀剣であれ甲冑であれ、あるいは(後に述べるように)金銀細工であれ、鍛冶製品の最上作は名工ヴィーラントの作と呼ぶ表現が相当人口に膾炙していたのであろう。Edda や Saga に目を転ずると、ヴィーラントの名がすでに鍛冶の領域にとどまらず、織物その他の「名工」の代名詞としても用いられている例証を見出せるが、これについては北欧文献の章で論ずる予定である。なお、古代英語のこの表現が頭韻を踏んでいて、

- (29) グレンデルおよびその母はカインの末裔ということになっており、本来はジークフリートの龍退治と同様な英雄による怪物退治譚であったものが、キリスト者の代表ベオウルフによる悪魔退治というおもむきに変えられている。後に老齢のベオウルフが身をかえりみず邪悪な龍と戦って合い討ちに倒れるのは、ほとんどキリストに彼をなぞらえたものと言うことができる。『ベオウルフ』の作者が聖職者と推定されるゆえんである。なお、グレンデルは片腕をベオウルフによって打ち落され、翌晩母親の怪物がその腕を奪い返しにあらわれるが、結局怪物の住み家の沼における一騎打ちでベオウルフに退治される——という構成はわが国の渡辺綱の羅生門鬼退治譚によく似ている。これについては、島津久基：『羅生門の鬼』、平凡社、東洋文庫269、1975年、3～31頁を参照。

耳に快い響きを与えたにちがいないことも留意する必要がある。

4) アルフレッド大王のボエティウス翻訳

子供の時からゲルマン古詩を愛好したウェセックス王（後に英国王）アルフレッド（Alfred, 849～899年）は古典古代の学術に対する造詣も深く、長いこと悩まされてきたデーン人ヴァイキングの侵寇を喰い止めるのに成功した後、各地から著名な学僧をよび集め、彼の宮廷を文化の一大中心地たらしめた。これはカール大帝の「カロリング朝ルネサンス」にならって「後期アングロサクソン・ルネサンス」等と呼ばれる。この宮廷ではキリスト教的ラテン文化のみならず民族固有の英語文化も尊重され、アルフレッド自身がその双方の文化融和の体現者として中心に位置していた。オロシウス(Orosius)の世界年代記やグレゴリウス教皇の『牧羊者心得』(Cura pastoralis)、ベータ尊者(Beda Venerabilis)やアウグスティヌスの著作等の翻訳が——アルフレッドも直接間接に参加して——行なわれたが、ヴィーラントに言及した箇所をもつボエティウス(Boethius)の『哲学の慰め』(De consolatione philosophiae) 翻訳もそのひとつである。

死を目前にしたボエティウスが哲学の女神と問答し、ついに神の摂理に導かれる心の過程をつづったこの書は、中世全期を通じて広く読まれた。アルフレッド大王の他に、ザンクト・ガレンのノートカー (Notker der Deutsche, 又は N. Labeo) や、はるか後のチョーサー (Chaucer) もこの翻訳注解を行なったことは有名である。

アルフレッドの師匠のひとり、ウェールズ人のアサー (Asser) の助力を得て行なわれた⁽³⁰⁾この翻訳においてアルフレッドは、原文に盲従するので

(30) 翻訳作業は、アサーが多量の注釈書にもとづいて解釈し、アルフレッドがそれをウェセックス語で表現したということが William of Malmesbury の Gesta regum に語られているという。Brandl: 上掲書1068(128)頁参照。

はなく、自由な補足的文章を挿入したり、当時の現実に則したわかりやすい例に言い換えを行ったりした。この点で、達意の名訳として知られるイシドールス (Isidorus) の古高ドイツ語翻訳 (訳者不明) に類似している。ヴィーラントに関する言及もこのような翻訳態度を考慮に入れてはじめて納得のいく種のものなのである。

ラテン語原文⁽³¹⁾ (第Ⅱの書, Ⅷ, 韻文部分, 15~16行)

Ubi nunc fidelis ossa Fabricii manent,
Quid Brutus aut rigidus Cato?

信義の人ファブリキウスの骨は今どこにあり、
ブルートゥスや謹厳なカトーはどうなったか。

(渡辺義雄訳『哲学の慰め』筑摩叢書139, 1969年, より)

哲学の女神が囚人ボエティウスに、地上の栄誉や名声が何になるうかと説いている箇所である。ファブリキウスは「清貧, 厳正, 廉直をもって知られたローマの将軍, 前282年執政官になる」, ブルートゥスは「ローマ共和国の建設者, 前509年初代の執政官となる」(引用はいずれも上掲邦訳書の訳注から), カトーについては言うまでもない。このように古代ローマで最も著名な人物を3人あげて現世のはかなさを強調しているのだが, アルフレッドの古代英語訳はここで原文の枠を抜け出て, ゲルマン古代の英雄世界に羽ばたくことになる:

Hwæt synt nu þæs foremeran and þæs wisan goldsmiðes ban Welondes?

[中略] Hwær synt nu þæs Welondes ban, oððe hwa wat nu hwær hi wæron? Oððe hwær is nu se foremæra and se aræda Romwara heretoga,

(31) 引用は Stewart/Rand (ed.): Boethius, The Loeb Classical Library 74, London 1968, による。

se wæs hatan Brutus, Oðre naman Cassius? Oððe se wisa and fæstræda
Cato, se wæs eac Romana heretoga;⁽³²⁾

あの有名で賢い金細工師 ウェーロンドの骨は今どうなっているのか。
〔中略〕あのウェーロンドの骨は今どこにあり、まただれがその在処を
知っているのか。あるいは、あの有名かつ勇敢なローマの統率者、ブル
ートゥスという名の、カシウスとも呼ばれた、あの者は今どこにいるの
か。それからまた、同じくローマ人の統率者であったあの賢い、沈着不
動のカトーはどこに？

わずか2行の原詩が、原文からあまりにへだたった部分を除いてもなお
かつ、これだけの尨大な散文に敷衍されている。そしてブルートゥスやカ
トーに関する敷衍は敷衍の範囲内にとどまっていると言えようが、ファブ
リキウスをヴィーラントに置き換えたのは、もはや敷衍とは言いがたい。
アルフレッドはここにおいて明らかに Fabricius という固有名詞を、その
語源となった普通名詞 faber「(特に堅い物質を扱う) 工人, 大工, 鍛冶屋」
に結びつけ、こうして fidelis な著名人 Fabricius から, foremære「著名
で」wis「賢い」goldsmid Welond「金細工師ウェーロンド」という, ゲ
ルマン人なら知らぬ者としてない名人鍛冶の名を引き出したのであった。⁽³³⁾

ところで、上に引用した散文テキスト (B 写本) とは別に、頭韻による
韻文翻訳 (C 写本) も存在する。散文訳では省略した部分にもヴィーラン
トの名前が登場するので、(ブルートゥスとカトーの部分は今回ははぶい
て) 以下に引用する。

-
- (32) 引用は W. J. Sedgefield (ed): King Alfred's Old English Version of Boethius, Oxford 1899, Reprint Darmstadt 1968, p. 46, による。
- (33) Fabricius から「鍛冶屋」を連想するのは語源的に全く自然である。Humanismus の時代にそれまで (独) Schmidt (<Schmied), (英) Smith (<smith) と名乗っていた人々の多くが, Faber や Fabricius というラテン名に変更した事実もこれを裏づける。

hwær sint nu þæs wisan Welandes ban
 þæs goldsmiðes, þe wæs geo mærost?
 forþy ic cwæð þæs wisan Welandes ban,
 forþy ængum ne mæg eorðbuendra
 se cræft losian þe him Crist onlænð.
 ne mæg mon æfre þy eð ænne wræccan
 his cræftes beniman, þe mon oncerran mæg
 sunnan onswifan, and ðisne swiftan rodor
 of his rihtryne rinca ænig.
 hwa wat nu þæs wisan Welandes ban,
 on hwelcum hi hlæwa hrusan þeccen?⁽³⁴⁾

あの賢いウェーランドの骨は今どこにあるのか、
 かつては知らぬ者となかったあの金細工師の。
 賢いウェーランドをここで引きあいに出すそのわけは、
 この世に生きるだれであれ、キリストが与えてくれる名声なら、
 それを失なうことはありえないから。
 孤立無援の浮浪者からさえ、たとえば太陽を呼びもどすのが
 不可能のように、また大空のすばやい運行をだれも
 狂わすことができないように、だれも彼の名声を奪えはしない。
 あの賢いウェーランドの骨が今この丘の土中に
 散らばっているのか、だれが知っているのか。

前に指摘しておいたように、ここでヴィーラントは刀鍛冶でも鎧鍛冶でもなく、黄金をあつかう goldsmið となっている。さらに注目すべき点は、殊に韻文訳にあてはまる現象であるが、þæs wisan Welandes ban というなかば定式化した表現における形容詞 wis「賢い」である。散文訳にも þæs wisan goldsmiðes ban Welondes の他に、引用では省略した部分に Forþi ic cwæð þæs wisan「この賢者（の骨）を引きあいに出したそのわ

(34) 引用は Sedgefield: 上掲書 165頁 から。

けは」とある。結局ヴィーラントを修飾する形容詞は6例中5例までが wis で、1例が wis とならんで foremære をもつが、何ももたないのは1例にすぎない。こうして見ると、wis は Weland に対する固定的 Epitheton——deus omnipotens などにおけるような——と考えてよいであろう。⁽³⁵⁾ もちろん、韻文訳における wis は Weland と頭韻を踏むための一便法であるにはちがいないが、散文訳にも wis は用いられており、しかももともと Epitheton には響きを耳に快いものとする使命もあるのだから、頭韻技巧であることが Epitheton でないことの証明とはならない。いずれにせよ古代英語圏で、ヴィーラントに「賢い」という特性が切り離しがたく結びついていたことは留意する必要がある。

これで古代英語関係資料の検討をひとまず終え、次稿で古代北欧語資料——特に Þiðrekssaga と Völundarqviða について——を検討する。古高ドイツ語圏の大陸では、すでに見たラテン語の『ワルターリウス』以外にヴィーラント伝承を含む資料は残っていないのだから。

(続)

(35) 「特性表示の形容詞的語句」とでも訳しうる Epitheton は、rotes Gold, weiße Hand のような「類型化の」Epitheton と Giselher der junge, Sifrit der vil küene のような「個性化の」Epitheton とに分類できる。se wisa Weland はもちろん後者である。形容詞としての機能だけでなく、口調をととのえる働きも持ち、この点日本の枕詞にも一種通ずるところがある。ゲルマンの宗教的文芸にもよく用いられる。たとえば Ahd. Isidor に見られる Epitheta については、拙論：Die Kunstprosa des ahd. Isidor, 『エネルゲイア』, 3号, 1971年, 36頁参照。